

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第862号 平成27年1月13日

桃太郎（3）

これまで産経新聞での義家氏の主張と朝日新聞での池澤氏の主張を読みながら、

- ・「伝統的な日本人」とは、どういう事なのだろう
 - ・「桃太郎」は、「日本人の心性」を代表しているといえるのだろうか
- という2つの問題について考えてみました。

そこで今日は、

- ・池澤氏の「桃太郎」解釈は唾然とする程の物なのか
- ・池澤氏のエッセー「狩猟民の心」が教科書に掲載された事について、それぞれ取り上げる事にします。

まず、義家氏が、池澤氏の「桃太郎」解釈に対して『「伝統的な日本人」を唾然とさせるものだ』と指摘している事について考えてみましょう。

「桃太郎」は、鬼ヶ島に鬼退治に行き鬼達を降参させると、鬼達が集めた沢山の宝物を持ち帰るという物語ですから、鬼の側からすれば「桃太郎」は侵略者という事になり、けしからんではないかという事になります。

そういう評価の仕方は、福沢諭吉氏が子どものために書いた「童蒙おしえ草 ひびのおしえ」という本の中で、「鬼の物である宝を、意味もなく取りに行くとは、桃太郎は、盗人ともいえる悪者です。」と述べると共に、鬼が悪者で、世の中に悪い事をした事があるなら、これを懲らしめるのは良い事だが、「鬼の宝を取って家に帰り、お爺さんとお婆さんに上げたというのは、卑劣千万」だと述べている事でも分かる様に、別に目新しいものではありません。

実際、池澤氏も「知的な反抗精神養って」の中で、「20年以上前にこの『狩猟民の心』を書いた時は、『桃太郎』に対する世間のイメージを逆転できると得意になっていたが福沢諭吉氏の「ひびのおしえ」を発見して、「自分よりずっと前に同じ事を明治期の偉人が言っていた」と述べています。

つまり、義家氏が唾然とした思想や見解というものは、決して池澤氏のオリジナルではなかったという事であり、むしろ唾然とするといえは、芥川龍之介作の「桃太郎」の方でしょう。ここに描かれている「桃太郎」はとんでもない厄介者で、悪党といわれても仕方ありません。しかも、晩節は非常に不幸な末路を辿ったように

描かれていますので、この「桃太郎」を読むと、私たちが「桃太郎」に持っているイメージはかなり変わると思いますよ。

最後に、教材としての「狩猟民の心」について考えてみたいと思います。

池澤夏樹氏の「狩猟民の心」がどのような意図と経過で教科書に掲載されたのか私には分かりません。ただ、義家氏が指摘しているように、「例えばこの単元を用いて、偏向した考えを持つ教師が『日本人の心性とはどのようなものであると筆者は指摘しているか。漢字4字で書きなさい』等という問題を作成したらどうなるか。生徒達は「侵略思想」と答えるしかないだろう」というのは、否定できないと思います。

私自身は、「狩猟民の心」が教科書の教材として果たして適切だったのか疑問少なしとしませんが、「狩猟民の心」が教科書に採択された経過はともかく、「その教材を如何に活用すべきか」という点について考えなければならない事は多々あるように思います。少なくとも、単純に池澤氏の見解に沿った形で授業を展開するのではなく、狩猟民と農耕民の暮らしの違いとそこから生まれて来る考え方の相違、昔話とはどういうものか、またその伝承の経緯、更には「桃太郎」をどう読むか、他の昔話との相違点等々、面白く、かつ、発展的な学びへと結び付けて行く事が必要ではないでしょうか。

この教材を使用して、実際にどのような授業が展開されたのかは承知していませんが、仮にも、義家氏が指摘するような設問をして授業が終わるという事であれば、教科書をなぞっただけであり、教科書を十分咀嚼し、教材研究した上で発展的に教えたとは到底いえないと私は思います。

池澤氏は、「一つのテーマに対していかに異論を立てるか。知的な反抗精神を養うのが教育の本義だ。」と述べています。私は、池澤氏の「桃太郎」への評価はともかくとして、「知的な反抗精神を養うのが教育の本義」という点については、異論を差し挟むつもりはありませんし、であれば、池澤氏の「桃太郎」観とは別の論点も当然議論して然るべきでしょう。

一方的に押し付けられた考え方に無批判に従うのではなく、「待てよ」と立ち止まり、物事を深く考え、行動する事が出来るというのは「生きる力」そのものであり、そうした力を身に付けさせるというのは、教育の極めて大きな責任だと思います。

教科書を読みこみ、咀嚼し、膨らませて子ども達にぶつかって行く、そこでの白熱した学び合いこそ、教育の醍醐味であり、喜びなのではないでしょうか。

(塾頭：吉田 洋一)